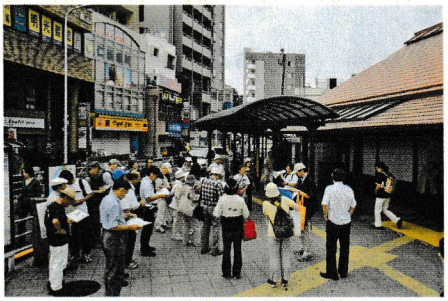
渡辺生子（日野図書館分館長）：本日はお申込いただきありがとうございます。私は日野図書館で働いている渡辺と申します。



日野駅前にて

日野宿発見隊という活動は始めて４年目になるのですけども、地元の大切なお宝とか地元のことを話して再評価する、このまちのいいところを見つけて評価しようと、それをみんなでやろうということで図書館が中心になってやっております。まち歩きを基本に掲げていく中でたくさんの古い写真が見つかって、その写真をただ保存するだけじゃなくて、まちの中で、みんなで見てもらおうということで、「まちかど写真館」という形であちこちに昔の、昭和、そうですね、主に 30(1955)年代ぐらいが中心になるのですけど、まちのお宝を貼り出しております。

今日はそのお宝を見ながらこのまちが、昭和の時代はどんなまちだったのだろうか、このことをまちの皆さんに説明してもらいます。日野宿発見隊では何回もまち歩きをやっているのですけど、いつも立派なものを求めて、文化財だとかそういったものを求めていくのではなくて、まちの皆さんが大切にしてきたお宝や、普通の人がずっと残してきたそういったものを「お宝」として大事にしよう、それを次の世代に受け継いでいこうと、そんな思いでやっている活動です。だからそんな立派なものを見るためということではないので、地元の人がこんなものですよという紹介をしていただく。そんな形になりますので皆さん、そのつもりでよろしくお願いいたします。

それでは今日はお昼ぐらいまで、地元の皆さんの説明を聞きながら歩くという形になります。今日の講師の先生の紹介をいたします。それでは地元、北原というのですけどね、北原・四ッ谷地区を歩くのですけど、北原に長く住んでいらっしゃっている**松本保**さんをご紹介いたします。

松本保（北原）：今館長がおっしゃったように長く、77 年住んでいます。そんなに詳しいことはわからないんですが、大体聞いたこととかそういうことで説明できたらと思います。よろしくお願いします。

渡辺：よろしくお願いします。それではあと、ここのところには地元の人に出てもらうんですけど、今日の会のサポーターとして、郷土資料館から**北村澄江**さん、よろしくお願いします。わからないこととか何かあったら北村澄江さんにお願いします。

それから、八王子城のガイドをやっている**須永克彌（かつや）**さん。すぐそこに住んでいらっしゃるのですけども、やはりこの日野の私たちの歩くところが甲州街道以前の古道であったとか、そういったことを説明してもらうのが須永克彌さんです。よろしくお願いします。

それともう一人、日野の駅前に長く住んでいらっしゃって、日野煉瓦という工場や、煉瓦をつくってＪＲ日野駅を開設したり、今でも日野駅の多摩川陸橋というのは、日野でとれた煉瓦でつくられて 120 年間、今も支えている煉瓦を作ったもとの、そのあたりをお話していただく**河野喜映（よしてる）**さんをご紹介いたします。河野さん、ご挨拶をお願い

します。

河野喜映（横町）：　おはようございます。今ご紹介いただいた河野です。突然のことで、そういったお話を聞きたかったのですけど、ぜひ質問してください。そのときに知っている範囲でお答えしたいと思います。よろしくお願いします。

渡辺：では、ところどころ質問とかあったら私に聞かないでください。私は素人で全く、連れて歩くだけなんでね。今のプロの方に聞いてください。それでは先頭を、今日は日野図書館の石嶋が先頭をきって歩きますので、そのあとに事故のないように歩いて行ってください。ではよろしくお願いします。

石嶋：ではちょっとその前に。きょうのコースなのですけど、今日野駅を出まして甲州街道を渡り向こう側に、反対側に出ていただきます。それで旧名、昔の名前だと町名ですけども、森町とか北原、そのあと四ッ谷の方を回りまして日野宮神社。ここは神社の中に入らせていただける、本殿の中に入らせていただけそうなのですけれども、そうしたらそのあと西町という、通りまして今度は日野駅のちょうど西側の方にたどり着くと。大体３時間を予定しております。途中日野宮神社でおトイレということで、若干そこまでの距離がありますけれども、よろしくお願いいたします。それでは皆さん、甲州街道を渡っていただいて反対側に出ていただきます。

河野：ここの通っている道が昔の滝山道、線路の下のところのこの部分。この部分、向こうへ行くところが、線路沿いのところで、線路はまだこの頃は柵も何もありません。割と私ら自由に登っていって、降りて入っていた。家のまわりでまだ事故も何もない段階の写真です。この近所の子どもたちということです。

とにかく事故が起きるためにだんだんだんだん入りにくくなったというのは、線路にですね。事実私なんかはこの先から上へ登って多摩川へずっと線路の中を歩いて行ったとかですね、そういうことをやっていましたので、非常に今から思えば危ないことをやったなと思いますけど。

石嶋：この写真を提供していただいた方は今自転車置き場になっていますけど、安西辰司さんです。

渡辺：安西さんの奥様です。どうもありがとうございました。

石嶋：それでは前の方に、細いですけども。
では前に進みます。

33　線路脇で遊ぶ子どもたち - 森町 -
昭和 30（1955）年代中頃
安西辰司氏撮影

河野：今、最初の写真をご覧いただきましたね。当時はこのフェンスだとか上の柵ですね、これが無くてむき出しの土手だったです。当時の道幅が、そこのいま入ってきた狭いところですね。そこに当時の道幅が残っていますけれども、ここになぜか誰も使わない階段と扉があります。実はここに昔の古いのがあるんですね。ですから例えば高速道路、中央道ね。あそこでも誰も使わないだろうと思われるようなところに橋がかかったりしてるんです。そういうのがあるんです。昔の歴史を引っ張って、役人が地元の人たちの要請に負けて、何か無駄遣いをしたのかもしれません。一応ここの存在もひとつ頭に入れてください。

石嶋：じゃあ何か、松本さん、何か付け足すことがあれば。

松本：この道は本当に、こういう道じゃなかった。こういう斜めの道ですよ。それで今そこのマンションね、これが缶詰工場って、藤野缶詰工場っていうのがあって、今パチンコ屋のあそこに藤野という家がありますけど、あの人が社長かもわからない。それでそこに田んぼがあってね、これを越えていって深い池があって、そこにカンテンや何かがいっぱいあってね、その中に足を突っ込んで遊んだり何かしたことがある。で、さっき言われたとおり、これは開かずに多分残って、開かずって、坑道だと思うんですよ、これね。地権図では。それでこれは残っているのかと思うんですね。

石嶋：じゃあ前の方にお進みください。あ、ごめんなさい、ちょっと追加があります。

松本：それでみんな釘をつぶしたりね。

須永：さっきの話、いいですか。この道の話。すみません、さっき谷さんがちょっと言っていましたけど、今これから通る道が古い、旧の甲州街道というか、江戸時代以前の甲州街道と言われています。これで、ここを越えて、ずっと少し戻ってさっきの缶詰工場より少し先に、２枚目の裏に地図がありますけれども、加賀塚公園というのがありますけども、そこの前へ続いていて、後北条の時代に、後北条の武将がそこで切腹をしています。江戸時代の甲州街道以前の甲州街道がここのところだと言われています。滝山城へ行く道だそうです。

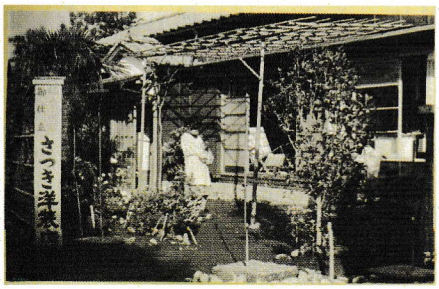
松本：ここが通称「不動さま」と言ったんですけどね。何かこの辺でやはり講があって、その講でこの辺の日野町の人たちを、お札をあれしたり何か、そういうのをやっていた家なんです。粟の須にもそういう家がありますけどね。けっこう講中が大勢いたような、ここではないのですけど粟の須にはそういう書物もありましたね。この一帯を本宿って、もう昔から本宿。ですから滝山道の、そこが本宿でそこから左へ折れたのが八王子の方へ行く。こっちは滝山の方へ行く。

32　日野駅北東　- 森町 -

昭和 33(1958)年　乙津由敏氏撮影

須永克彌（森町）：この写真は、今は日野本町四丁目になっていますが、古い時代は本宿ですね。それからつい最近までは森町といっていました。その当時の写真ですね。こちらのお宅がその隣にあります。ですからもう少し先に寄った、そこの２階家がありますね。その辺りを写し込んだ写真です。

石嶋：これはもう１枚、この提供していただいた乙津さんなのですけども、「さつき洋装店」というのがこういう形で、これが今建って、そのあとこれ昭和 33(1958)年なんですけども、ここで洋装店を開かれていたそうです。今もう神明の方にお移りになっているんですけど、当時ここに。これをよく見ていただくと中央線が、土手が見えますけどね。向こう側の四ツ谷の方も見えているみたいですね。はい、じゃあお渡りください。



さつき洋装店
昭和 33(1958)年　乙津由敏氏撮影

松本：向こうからずっと流れて、これから行く「精進場」というところまで流れている川がある。この辺、この道から全部こちら側は、その川までは全部田んぼです。そこに、今写真のある家があるところは、井上源三郎さんの家。

石嶋：これ、熊さん、左側で、こっちが熊さん。

松本：これが今これから通るところの井上源三郎資料館の家。そこまでずっと全部、こちら側は全部田んぼでした。

30　田植え　- 北原 -
昭和 34（1959）年　井上平吉氏所蔵

松本：これが井上平吉さんの家の裏側で、これは竹やぶで、これがそこの家の、その隣が日野源作さんという家なのですけど、一番裏のところがここなんですよ。ですからこれは向こうへ行ってみないと現況がちょっとわからない。これは裏ですから。そして向こうが欣浄寺堀って、北原には３つも４つも川が、用水が流れていた。

石嶋：では須永さんの方からちょっとここの、北原道について。

須永：先ほど来、滝山道の話が出ていますけれども、ここの道が江戸時代の甲州街道、この南側にありますけど、現在の甲州街道制定よりも前の道で、日野の村々を貫通していた中世期、古い時代の道に続いています。で、西の方に行くには先ほどの線路、階段がありましたね。あそこを通過してその先、西側に、現在区画整理で加賀塚公園というふうになっていますが、公園の奥に加賀塚というのがございます。

加賀塚というのは日野本郷を支配していた地侍の頭領と思われますが、今から約 450 年ぐらい前の人物というふうに考えていいと思いますが、この日野地区本郷あたりを支配していたのが加賀入道。それからもっと西の方へ行きますと、この道が東光寺、今は成就院

ですね。そこに薬師堂が移設されていますけれども、その西側に薬師堂がございますね。そこを通過して今度は南に上がります。七ツ塚ですね。七ツ塚の琴平宮、金毘羅宮でしょうかね、あれが祀られている塚がありますけれども、そこを右折して八王子に入ります。当時は粟の須と言っていましたけれども、そこの東福寺というお寺があります。成就院も東福寺も古い時代の天台宗のお寺ですね。当時の街道はそういったような寺々を経由しながら、西の滝山へ向かいました。

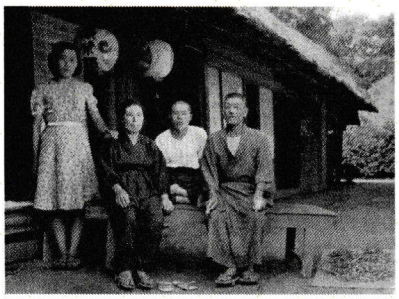
で、滝山城主北条氏照ですね。四代目氏政の弟氏照の居城ですが、後年滝山城から八王子城へ移っていますけれども、この北条氏照からこの地はあるんです。強い支配を受けていた。ですからこの辺り、ここに勢力を張っていたのが福島右近、こういう侍だったんですね。西に向かっては滝山・八王子城方面への道筋がここに当たります。もっと時代を下りますと、日野の七ツ塚周辺に西党、武蔵七党の時代ですね。ここに西党の本拠地がございました。西党の流れで由井二郎という名前の人、府中にある国府の役人を務めていた人。その人が八王子の由井野というふうに言われていますけれども、現在の元八王子地区の弐分方だとか大楽寺地区、この辺に由井牧というのがありまして、そこの長官をやっていましたね。それからその由井一族がその道を通って、今度は東に向かいます。東には当時の国衙、武蔵の国庁ですね。武蔵の国の国衙がございました。現在の大國魂神社もその一部ですね。そこへの行き来に使った道だと思われます。日野は、東の方に行くにはこれを東に行って、普門寺というのがあります。普門寺の境内を、現在墓地がありますが、河岸段丘の一段上の段になりますね。そこを上がって一中をかすめて、今日参加なさっていますが、鈴木さんの店（鈴藤）がありますが、そちらのお店からずっと現在の日野警察方向へ向かい、古い甲州路ですね。そこへつながって、そこから万願寺の渡しを渡り対岸の台地上を東に向かう。それで府中へつながる。こういうその主要な地方の、当時はここが主要な道筋だということでございます。

北条氏照から地割を命じられて、本宿という名が残っている地区を中心に町割を作ってたのが日野宿の始まりですね。これが江戸期に入っていったらこの街道が、現在の甲州街道筋に付け替えられます。こういう歴史になります。

石嶋：はい、じゃあちょっと前へ行ってください。

渡辺：保さん、源三郎さんのお話。

松本：ここが井上源三郎の生家です。ここに書いてあるけどね。それでこれ、こっちから撮ったんじゃなくて向こう側から撮った絵だと思うんですよ。ここがこの道、向こう側から撮ったんだろうと思うんですよね。それで、これがケイさんで、誰のことで言えばいいの、源三郎かね。源三郎じゃもう代が違うからね。



31　井上覚太郎家　- 北原 -
昭和 19(1944)年　井上雅雄氏所蔵

石嶋：当主から、雅雄さんから見て。

松本：今の当主は井上雅雄さん。（写真左から）雅雄さんのお母さんがキヨちゃんていう、この方なんです。で、おばあさん。キヨちゃんの弟、それからこれがお父さんです。

覚太郎さん。そしてやはり地形上南へ長い家で、ここが入り口でここから奥の間がもう1間ぐらいあって、ずっと。ここがやはり甲州街道と同じで細長い家が多いんですよね。ですからずっと道路に対して細長い家がみんな、大体東向きに建っていたの。全部草屋根でね。で、蔵がこっち側に、この辺にこの蔵があったんですよね。この蔵は動いていませんから。

石嶋：で、これ、もう一枚は、時代は昭和34(1959)年ぐらいらしいんですけど、そのおばあちゃんですね。今の雅雄さんのおばあちゃんのケイさん。が、これはサトイモですかね、何か。

松本：ああ、サトイモだな。イモをこしらえているんだね。

石嶋：ちょうど建物は同じですよね。この前あたりでなさって、ちょうど川が隠れちゃっていますけれども、この写真もご提供いただいています。

それでは前の方にお進みください。

井上源三郎生家

昭和 34(1959)年頃　馬場一衛氏撮

松本：このお寺も古いお寺らしいんですけれども、確か大正12(1921)年だと思うんですけど、焼けちゃいましてね。この山門だけ残っているんですよ。それで山門の横になっているところがね、焼けた残りがね、そのまま残っています。見に行く？

それで話は別なんですけども、今ようやっと日野の八坂神社のお祭りが終って、大きい宮神輿があるんですけども、その宮神輿ができる前にはやはりあれに似たような神輿があって、「加組」というこの日野駅周辺の4町内へ払い下げてもらったのではないかということらしいんですけれども、それがここに、まあ神輿なんてでかいものですから、やたら置けないのでここに預けておいて、それでそれも燃えちゃったの。それでこれね、7年ぐらいかけて、かけてだか何だか、完成が大正7(1918)年か何かだと思うんですけども、出来上がっているんですよね。うちにお茶を、うちは檀家ではないんですけれども、こういうお茶をあげる真鍮でできたやつのに「欣浄寺再建祝」と書いたものが、今でもそれは仏様へお茶をあげるのに使っていますけどね。これはやはり北原に内田金三郎さんていう大工さんがおりまして、その方がこれを作った。あと、大昌寺という日野用水の、今あれをやっているところの大昌寺の鐘撞堂なんかもその方が作って、あの擬宝珠（ぎぼし）の裏のところに、大昌寺の鐘撞堂をあれしたときに、やはり書いてありましたね。でも檀家さんは余り、一時その、戦前までは無住が多かったんですね。今、工藤さんという方、今の園長さんのお父さんがここへ来て、これだけの立派なお寺さんになったということです。それからここに何か、源三郎がどうのこうのなんて。

谷享司（仲町）：ここは説明に入ってないんだけど。この碑なんですけれども、台座を見てもらうとわかる「門人」というのが書いてあります。これは日野義貴（よしたか）という、この境内で寺子屋をやっていた先生なんですね。それでその門人の中に井上源三郎であったり、この辺を代表する人たちの名前が、この台座の後ろ側にみんな刻んでありま

す。よく新選組関係の方はそれを見たいって来るんですけども、後ろに入ると蚊に刺されるんでやめた方がいいとか。

石嶋：はい、じゃあ前に進みます。松本保さんのお宅の前に向かいます。

松本：ここに地蔵さまがあるんですけど、これは古いもので名和２(1765)年にできたものです。この間日本のお地蔵さま百選に選ばれまして、まあこれ、ここの北原部落の方たちが２月１日と 10 月 23 日かな、お念仏を申して皆集まってね、自治会館でやっております。

ここが松本保さんの家です。(笑い) それでこの一番左側にあるこの写真（No.29）ですね。で、ここの北原には地形上ここを北原というのは、ちょっと高台なんですよね。これから向こうへ行くと仲田という田んぼの辺なので、それで北原に３つ坂があった。ここが「大さんの坂」ってね、こちら側に古谷大吉さんという家があって、それで通称「大さんの坂」です。それからこの向こうへ行くと、そこに公民館の方へ行く坂がある、あれが「馬場の坂」と。もう１つ大北原という、北の方に竹内という家があって、そこにも坂が、北原に３つ坂があって、昔リヤカーや車を引くのに坂で大変だったので、やはり通称「坂」ということで。

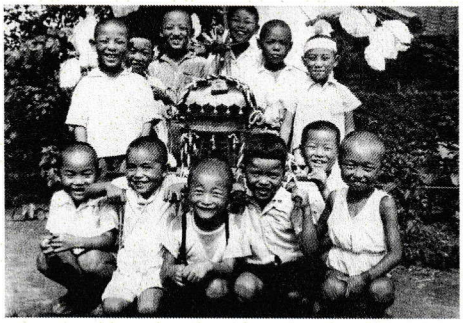
28　松本保家-北原 -

昭和 38(1963)年　松本保氏撮影

29　北原道 - 大さんの坂 -

昭和 27（1952）年　松本保氏撮影

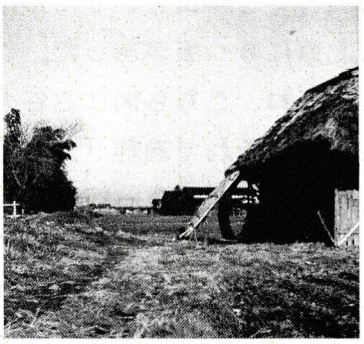
それで一番左の写真（No.29）なんですけど、この辺から撮った写真なんですけども、その電柱は大体その電柱と同じ位置ぐらいだったんですよ。それで後ろの方に草屋根があるんですけども、これがちょうどこの向こうにあったんですけども、もう全然家ばっかりで、私もわかりません。



27　北原の子ども神輿
昭和 26（1951）年　松本保氏撮影

この真ん中の写真なんですけども、これは、私が昭和 22(1947)年に、もののない時代、何か子どもの頃からお祭りが好きで、この神輿を北原の、私がガキ大将だったので、作ったものです。今でもあるんですけどね、図書館で出してくれって言うんですけどね、今みんな立派な金具を付けたり何かして、立派な神輿なんで、見せられるようなものじゃないんですけどね。ちゃんと後ろに書いてあるんですよ。それからこの屋根裏にそのガキの連中が、その裏にみんなの名前が書いてあります。この人たちはもう 60 幾つかね、もう二人ばっかり死んじゃってるけどね。それでものがないころで、これなんかはあとをつくったんですけど、ちょうど終戦後ですから進駐軍の缶詰を切って、それで金具にして、それで作ったものです。

石嶋：いいですか、では水車の方へ。



23　北原水車
昭和 27（1952)年　松本保氏撮影

松本：北原の共同水車って言いましてね、北原の人、北原、森町、横町、仲町も何人か入っていて、その人たちで共同経営して水車をやっていたんですけども、杵が６つありましてね。それで百姓の、少ない方は２人で１日とかっていうふうにね。大体米・麦をつくだけでね、粉はひけません。それでここがこの道です。ここに水門のあれがあるんですけど、それがここにあって、こっちへ行くのが用水。いらないときにはこっちへ流すと。で、水車堀はこっちへこう来て、それでこれになっている。水をこう上げて。それで農業がだんだん少なくなったり、機械化されて使う人がいなくなって、結局解体しちゃったということで、あんなボロに。

それで、この辺から撮ってますから、そこに中央線の鉄橋があったり。で、全部この、これをされたこれからこっちは全部田んぼですからね。それでうちなんかの場合そこから、高いので、先ほど須永さんが言ったとおり万願寺の方から、甲州街道とは言わなかったけど道があって、初めての高台なので、うちの屋号が「台」と言われているんです。

これもちゃんと工場ということで、昭和 17(1942)年かな、八王子警察に工場の認可の許可証が必要で、それで、うちで一応管理していましたので、その全部許可証がうちにあります。何時から何時まで作業していいと。それから年間どのぐらい米・麦をつくとか、そういうのをあれしましてね。電気も引いてないしね、本当にこれがあるころは本当にのどかで、うちの奥の縁側から見るともう全部田んぼ、こっちはね。ここなんか全部ないですからね。うちはこの向こう側ですから。これがこっちへこうきて、この辺に水車が、この輪っかが。

不明：何年頃ですか。

松本：昭和 20‥‥。

不明：昭和 29(1954)年に解体した。

松本：その頃じゃないかってちょっとね、わからないんですよ。これはまだ動いているころで。それでここに２つやっぱりほら、これが余水。余水っていうのは余っている水ね。

松本：その橋は、大門の橋を、大門の川を直すときに持ってきたんだというような話を聞いています。本当にこんなものじゃなくて、それで夏場、夏場といっても６月から７月お盆ぐらいまで、ここら辺一体水がじゃんじゃん増えちゃった。清水。というのは線路周り、線路から向こうの東光寺の田んぼが、麦を作って終ったあと水を、田んぼをかくために入れるわけですよ。そうすると、ただ乾いているところへ水を入れると、みんな下へ引いちゃうわけだね。それで「あらしろ」って１回水を入れてかき回すと泥ができてそれが目地になって水がもつようになる。その「あらしろ」ができるまではもうじゃんじゃん水が出てくる。だからここのうちはこれを作ってからまだ、東光寺の方は田んぼいっぱいありましたからね。そこへ井戸を掘ったんですけどね。井戸の土管を入れてあるんだけど、土管と鉄管が入っているんだけど。土管のところからもうどんどんどんどんものすごい水が。それでもう冷たい水でね、ずっと向こうからこしてくるから。この家に、結構大臣の方が、ここで八王子に越しちゃったんだけど、そこでその掘りぬき井戸を２回も掘ったけど出ないんだ。だから上っ面の水が流れて来たと言われてますね。だからもうこの道なんかずっとそこの、向こうの出口まで水が移っちゃって、裸足なんかで歩けなかった、ぐずぐずになって。

石嶋：じゃあ前にお進みください。

松本：今通っているところの左側に石垣があるんですけれども、少し残っていますけど、あれがここまでずっと石垣で、ずっと積んであったんです。よく蛇がいっぱいいてね、この石垣の間に。

松本：車からこっちは車掘って言ったんだよ。それでこの付近一帯が、これが今その水車までは欣浄寺堀と薬王寺堀が通ってきて、水車からこっちになると通称ですけどこれは車堀と言ったんです。それでこっちからは、仲田の方からくる川とここが合流していて、それが昔から言われる「精進場（しょうじんば）」と言われて、俺なんかの子どものころは「しょうしんば、しょうしんば」って言ったんだけど。それで馬入れ口になっていて、結構たまりになっていたから、もう本当に小さい頃はみんなここへ水浴びに来たんですよ。で、あとは田んぼをかいたあと馬をみんな、泥だらけだから洗ったり。

22　精進場付近
1929（昭和４年）　中嶋基宏氏所蔵

この写真はちょっともう少し先へ行ったところの写真なんです。この川は「やすべっ川」って今来たところですが、これは向こう側にありますけど、この川を越えるともうそのま

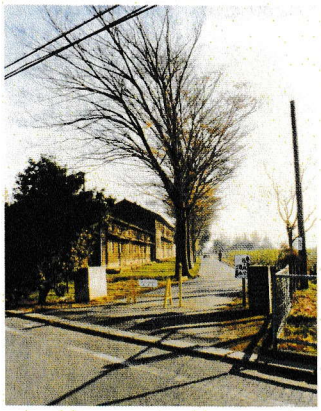
ま少し高台でね、だからこれは多分桑園がでも全然ないから、もう桑園ができているのか。

石嶋：その頃ですね、昭和３(1928)年か４(1929)年、じゃあその頃ですね。

松本：だからこれが、この川はちょっともう今は変わっちゃっているんですけど、それがこっちへね。で、これがうちの方から来ている。

不明：精進場って。

松本：何か、だからここであれでしょう、富士へ行くとか、何か身を清めたとか、何かそんなことじゃないですか。



21　桑園跡地　- ケヤキ並木 -
昭和 53（1978）年　松本保氏撮影

松本：この写真は、ここに掲示するものじゃなくて本当はそっち側に掲示するんだったんだけど、場所的な考えでこっちへしたらしいんですけども、このケヤキ並木ね、それがそうです。あんなにもうね、留守になっちゃってるとあんなにめちゃくちゃに減っちゃって、このケヤキ並木もすごくいいと思うんですけどね。今度そこが公園なり、こっちの方が残るらしいから、あんな囲いをしないで、その間、ケヤキ並木をずっと残しておきたいですね。

谷：だめ。あそこ、ペストとかね、あそこ入ると泥沼だから。

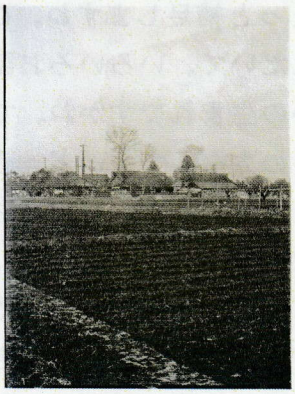
松本：だって泥沼は泥沼で。だってこれだったんだから。

谷：おかしいんです。あそこで分水していて中に引いてるんだけど、出口がないの、水の。それで１ヵ所あそこら辺に、隙間からこっちの川に流れ落ちてるんだけど、中でたまっているから泥沼化してるの。

松本：だから少し手入れすればあれじゃないの。なるんじゃないの。

松本：それで麦もそのころは２条まきって、こういうのがはやったんです。どういうわけだか。普通はこう１作ずつ、こうまいていくんだけど、だからこれが梨屋、松本。で、これが今、島ちゃんとこ、大下（おおしも）の。で、これがあそこの医者の天野さんの蔵。

松本：この写真は、この場所、今ちょっと違うやはり場所で、付ける関係上ここにしちゃったのですけれども、こっちがそうか。これがそうだね。石嶋さんが持っているのがこの辺から撮った、こっちがちょうどね。それでこれが松本という梨屋で、この辺一帯が梨畑だった。それからこの隣が大下という家で、四ツ谷では線路より、線路ができたために四ツ谷部落なんだけどこっちになっちゃったというか。この辺全部一帯田んぼです。それで、いつ頃かもわからないけど言われているには、ここがうちの畑なんですけども、蔵屋敷ってね、何かものの本にもチラッと出ているんだけど、欣浄寺の北の方に蔵屋敷があったということです。ここに、そっちの田畑と同じに、そのセンターラインぐらいまで



20　多摩川付近から見た四ツ谷方面

昭和 26（1951）年　松本保氏撮影

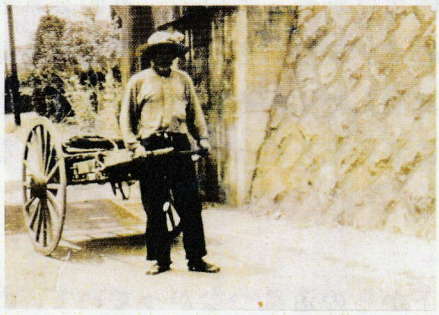
ずっとうちの田んぼだったんですけども、田んぼで、山では蔵屋敷って何かあったらしいんですけども、雑木林みたいになっていて、それじゃあもったいないということで、中央線ができるときにその土を、これ全部あそこへ売ったらしいんです。それは四ツ谷の人から前から聞いたことがある。それで、この道路ぐらいの高さまで泥を取っちゃって、それでここを田んぼにしたの。1 反 6 畝ばかりあったんです。この区画整理で半分ぐらいこれ、なくなっちゃったんですけれど。

石嶋：それでは前にお願いします。

松本：昭和 10 年（1935）代頃の写真だそうです。ただ、これを見るとこの石垣の目地とか、これなんかもまだ本当に新しいよね。今はあんなに真っ黒けになっちゃっているけど、これなんかね。この子なんかは、誰だったっけな、もうかなりの歳か、あるいはあっちの方へ行っちゃってるかどうかね。10 年、あそうか、でもまだあれだね。70 ぐらいだな。

19　中央線四ツ谷ガード下

昭和 10 年代中頃　天野鳳太郎氏撮影



四ツ谷ガード下をゆく老人

昭和 30（1955）年頃　加藤昌弘氏所蔵

石嶋：ちょっと補足しますね。この女の方は昨年亡くなられちゃったんですよ。写真を提供していただいて、いろいろお話をお聞きしようと思った矢先だったんですが、この人は大正ぐらいの生まれですかね。で、90お幾つかで亡くなられたんですけども、抱かれているのは長男の方なんですけど、そこの工場の２階にいらっしゃいます。

で、これと同じような、時期はちょっと違うんですけど、きょうこのツアーに参加している加藤君のひいおじいちゃんが、これは大八車ですかね。この新道ができたのが大正10(1921)年３月にこの新道ができたんだそうです。それまではもうちょっと北の方に踏切があったそうなんですけど。その名残というのがあるのかな。ちょっと確認はできないのですけども、この小島茂雄さんって、今年残念ながら亡くなられた方がいらっしゃるのですが、『四谷のむかし』という本があります。そこに結構詳しく書いてあります。その頃の、当時の様子なんかがわかるので、ぜひ図書館などにもありますので、お読みいただければと思います。

それではこの四ツ谷ガード下を通って反対側に出ていただけますか。いいですか、お願いします。

18　薬王寺遠景

昭和52（1977）年　松本保氏撮影

松本：この薬王寺の話なんですけど、今その工事しているところの向こう側にもう新しいいいのができたんですけども、もう本当にこれ、廃屋になっちゃっていて、この薬王寺は高幡の不動様の方の関係で、今の御前様のその前の方がここに住職でいたらしいですね。それでもうほとんど本堂も壊れちゃっていて、ただ山門だけが残っていて、その２本の木は、今あそこに残っているやつはそうかな。この２本のイチョウ。それで高速道路も見えるし、富士山もチラッとここに。これも私が撮った写真なんです。それでこの田んぼもこんな窪地になっているのは、やはりこれ、この中央線に多分土を売ったのかもわからないですね。

不明：ここに何となくあった道は参道の名残ですね。

松本：だからこれ、参道なんですよ。これが参道で下からの道につながっていて、だからやはりそこにも赤道がある。

石嶋：松本さん、ちょっと追加です。

須永：今お話があったこれは薬王寺ですね。今は全く姿を消しちゃっていますけども、

ここ、山門なんですよ。で、一説にですね、この地を支配していた加賀入道の屋敷地がここにあったと。そういう説があります、昔。そうすると周りを切り下げて堀にして、掘った土を上に持ち上げて土塁を築くと。そしてここの中に屋敷を。

松本：だって加賀入道は竹間だろう？

須永：中世の地方侍の典型的な形がここに残っているといっても、そう言われると今度はやっぱり加賀入道の屋敷がここにあったのかなあと納得できますね。そのあとお寺になったもの。で、加賀入道は八王子城が落城する寸前に寄居に、氏照から派遣されていました寄居の鉢形城へね、戦わないで帰ってきて多分申し訳ができないというので切腹しちゃった。こういう歴史を持っていますね。

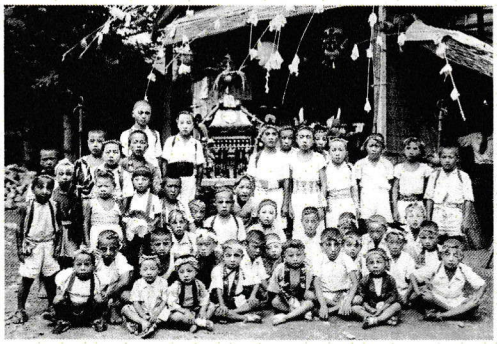
石嶋：この真ん中の、ここは参道ですよね。前は、中央線がないときはその反対側からこうつながっていたんですよね。

松本：で、その木があれだ、あそこにあるという。

石嶋：というわけですね、はい。それでその写真、松本が撮られたのは２枚の写真なのですけど、今日参加しているカメラマンの井上さんが１枚のパノラマ写真として再生してくれたものです。

はい、それでは前の方にお進みください。

加藤善巳（四ッ谷）：実際にそこに写真があるのが、のちょうど「四ツ谷地蔵」と書いてあるのがここにあったんですね。この小曾の木のところに。もとここに小さい小川が流れていまして、今そちらにも小川があるんですけども、私なんかが子どもの頃はここの小川でシジミがとれたんです。そのくらいきれいだったんですよね。ちょうど今こちらのお祭りの、昭和23(1948)年って書いてありますけど、この場所がちょうどこのお庭のところに今電気が、街灯が立っているところにあったんです。そのときの名残の写真なんですね。今、たまたま先生がおっしゃったのは、私が写っているでしょうっていうような。一番左に写っているのが私なんです。すみません。



15　八坂神社の祭りの日、お仮屋前に
集まった四谷の子どもたち
昭和23(1948)年　多田英夫氏所蔵

渡辺：かわいい。

松本：鼻たらしてるんじゃないか。（笑い）

渡辺：あ、ほんとだ。

加藤：ちょうど小学校１年生ぐらいのときの、６つか７つの時の写真ですね。

不明：貴重な写真ですね。

渡辺：同じ顔してる。

加藤：変えてはいないですから、多少体の大きさは違っても同じ人間ですので。（笑い）

松本：じゃああそこへ行って反対向きに、あの写真のそばでこっち向いて言ってくれる？

加藤：恥ずかしいんだよ。まあこちらは大先輩だからね。そんなふうなので、当時のお祭りの形で、私とかほかの子どももそうなんですが、みんな鼻に白いお粉を当時付けているんですね。これはここの地域もそうなんですけども、当時青年団という方々がいて、その方々が子どもにお化粧をさせてくださったんです。こんな形でやっていただいているんで、自分でこの白粉の鼻を付けたんじゃなくて。私特に色が黒かったものですから、目立ちすぎるくらい目立って。その頃ここの、松本さんからも話が出たと思うんですけども９月の１日がお祭りだったんですね、昔は。日野のお祭りもここ何年か祭日を利用してずれてきている関係ですけども、ちょうどこの頃は９月の１日、２日、３日がお祭りの祭礼で決まっていたんですけどね、みんなすべて。敬老の日にあわせてお祭りを持っていく形の。特にこのあと、ちょうど私一緒についていきますけれども、日野宮神社というところに行きますので、そちらでちょっと休憩とっていただきながら、そこにはトイレもありますので、もしご婦人の方でトイレを利用するのであればそこで利用してください。

16　四ツ谷地蔵堂

昭和初期　天野嘉明氏所蔵

石嶋：この写真はお堂が出ているので使ったのですけど、こういう感じで、食器を洗っているのかな。

加藤：そうですね、ちょうど今ここのお宮のところ、ここに水路があったんです。

石嶋：名残がね。大谷石。

不明：ああ、これに石垣。

石嶋：これは加藤フサさんって教えてもらったんですけど。

加藤：ああほんと、余りよくわからないな。誰のおばあちゃんだろう。

石嶋：ええ、いっぱいいらっしゃるから。

14　日野宮神社旧社殿
昭和 40(1965)年前後
天野嘉明氏所蔵

石嶋：ではここでこの写真だけじゃあちょっと。すみません、あとで加藤さんから本殿の方に入らせていただくのですけれども、その前にここに飾ってある写真なんですけど、さっきガード下で抱っこされてた男の子がいましたよね。その方の奥さんが多分お母さんと一緒に何かの祈願に。お子さんのかな。

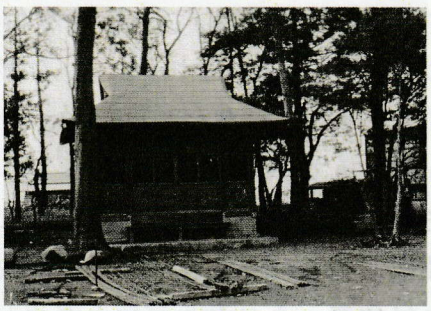
松本：結婚式じゃないの？真野さんじゃないの？

石嶋：結婚式ですかね、その頃の。

加藤：七五三かな。

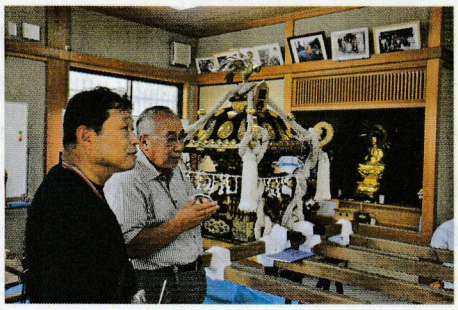
石嶋：３枚であるんですけど、３枚組みのやつがあったんですけど、それ。あとこれがこの近くにいる小野さんという方で、勝瀬という、神奈川の方から戦時中にダムをつくるので強制移住させられてこちらに移って来た方がいらっしゃるんですけど、そのお父さんが撮られた写真がこんな形で残っています。

じゃあ中の方をご案内していただけますか。



日野宮神社
昭和 40(1965)年頃
小野完二氏所蔵

加藤：日野市の重要文化財になっている仏像が。詳しいことはここに書いてありますので見てください。右側の方が、先ほどチラッとお話していたのですけれども、この四ツ谷地域はウナギを食べない伝説が昔からありまして、先祖代々こちらに住まわれている方を含めて、そうですね、50 軒ほどの家庭は今でもウナギ食べていません。私も食べていません。子どもも孫も、親も、ずっと先祖代々ウナギ食べていません。そういう家族が非常に多いんですね、この地域。で、これも聞いているかと思うんですけれども、多摩川の土手が氾濫するときに、ウナギがそこの穴に詰まって氾濫を防いでくれたという昔からの伝説がありまして、それ以来ウナギを神様として祀っているのが一番右の仏像なんですね。これはウナギの神様の、守り神というか、お使いをする神様だということでそこに出ているのですけども。上にも写真がありますけれども、秋篠宮殿下が２度ほどここをお忍びで来られているんですね。当然お忍びの姿ですからセーター着て、カーディガン程度で、真



小杉校長と加藤氏

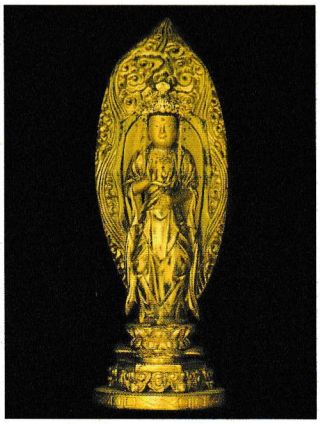
ん中に座っているのが秋篠宮殿下ですね。結婚されてからの写真ですので。あの人はナマズの研究をされているというのは聞いたことがある。それに関連してウナギを見に来ていたんだろうということです。知る人は知るで、結構有名なこの日野宮神社なんですよね。ここの日野宮神社は、松本もいらっしゃいますけども八坂神社とか、そういうところより神社としては一番古いらしいんですよ、日野でもね。「日野」という名付けになった起源のお宮でもあるという一つの説があるんです。

ここ数年前から特に今、参道から出てきたところ、万灯会といって自治会とか、永寿会という老人会の方とか、子ども会に絵を描いていただいて、12 月 31 日の夜の 11 時から、元旦の、1 日の朝の 2 時までの間に万灯会をやっているんですね。それがちょっと評判になりまして、去年あたりから随分お客さんがふえるようになりまして。実際にはお宮というのはお寺と違って、年会費の維持管理とか、そういうものが非常に少ないんですね。お客さんに来ていただいてお賽銭をあげていただくのがお宮の運営しかできませんので、できるだけお客さんを呼んでというか、そういう催し物をすることでやっぱり神社が成り立っていくんですかね。ひとつ縁があって見てみたいということがあれでしたら、12 月の 31 日の日に、夜の 11 時ですから。午前 2 時ごろまでやっていますので、ぜひ機会があったら見てください。非常にきれいです。お汁粉と甘酒等が無料で配布して、飲んでいただけるようになっていますので。

先生、私より一番説明できる方に、ちょっと先生から。

渡辺：では校長先生、お願いします。

小杉校長：今日お世話になりました。ウナギ伝説ということで、今皆さん、ちなみにこの仏像は、要するに服の、このたもとがウナギが上っている絵です。虚空蔵菩薩はウナギの使いではないかというのであるんですが。だからこの仏像の着物にウナギが上っている。ウナギが虚空蔵菩薩のお使いであるということ。もう一つはその、この多摩川の決壊しそうなときにウナギが、そのひびに入り込んで堤防の決壊を防いだという伝説があるんですね。今ウナギを食べていないと社長がおっしゃっていましたけど、おばあちゃんと話すとね、「息子は食っとるんじゃ」とか。でもお嫁さんは食べないってよくおっしゃっていますね。ですから日野じゃなくても、日野にいても四ツ谷にいても息子は食べてる。そんな話を昨日おっしゃっていました。



虚空蔵菩薩

あとね、私が東光寺小に来て初めて台風が来ましてね、自転車で地区、用水とかこう川を回っていますでしょう。そうしたら地元の方がね、「校長先生、そんな心配は要りませんよ。ここはウナギで守っているから大丈夫ですよ」なんて安心したんですよね。本当に私、日野に来てから一度も決壊ないですよね。決壊するのは全部浅川ですよね。

ということで、ウナギの日野宮。そして多摩川ですね。で、この日野宮神社の日野宮の日野が、日野市の語源になっています。そういう説もあるということですね。

加藤：さっき多摩川が氾濫云々ということは、小河内ダムができる何年か前に一度、多摩川の土手が、日野も決壊したことがあったんですよ。今の土手の高さはほとんど変わってないんです。それを乗り越えたことが私の記憶でもあります。当時ちょうど多摩川の土手側に水が越えたときに、避難者が出て、家具とか何かをリヤカーに積んで逃げるというのは思い出せるんですね。そのくらい水が一時、大水のときがありました。小河内ができてからは、本当にそういう点ではなくなりましたね。ただ小河内ができてから一度狛江の堤防のところで決壊したのは、小河内ができてからですけれども、日野ではその後はないですね。もうちょっとすると、土手から１メートルぐらいまでは、ちょっと水が多いと結構大水になることがあるんですけれども。ちょうど今の中央線から前後、決壊したことがあるんです。こういう形で。

不明：鉄橋の下とか、本当にもうものすごかったです。

不明：昭和 49(1974)年。

小杉：ここら辺の人は、さっき社長が説明されたここの阿弥陀如来というのがあって、ここにあったんですね。これが個人の所有地なんで、それを取り壊すときにこっちから持って行ったということで、もともとここの仏様じゃないんですよね。

加藤：さっき私の写真が写っていたという言い方はおかしいんですけども、そばに自治会館があったの。それは個人の所有の建物を自治会として借りていた建物で、そこの方のお父さんが亡くなったときに、相続にどうしても土地を手放さなきゃいけないという話になりまして、そこの自治会館にこの仏像３体が納めてあったんですけれども、そんな事情がありまして自治会館を壊すという形になりましたときにこちらに移している。これもやっぱり神仏ってちょっと一緒になっているのが不思議でないかなということですけども、一応お寺さんとか神主さん等にお伺いしたら、昔は神仏一体だったのでよろしいんじゃないかということのお許しが出たときに、こちらに移させてもらったんですね。

だからちょうど、先ほど話した秋篠宮殿下は２度来たんですが、１度目は昔の自治会館。で、２度目はこの神社に来られている。ちょうど前後の時期だったんですけど。はい、２回見えているんです。で、まあ皇族の話をするのもおかしいんですけども、ああいう普段着で来られて、警備の方はいらっしゃらないんです。私どもも来るというのは事前にはわかっていたんですけれども、何時に来るかというと一切情報を入れられない。教えてくれないんですね。中央高速で調布を過ぎましたというのが連絡だったんですね。で、この辺に警備の方が５人ぐらいしかいない程度の警備で、来られた方は大学の教授と運転手さんと本人だけです。そのくらい普段で来られる形はその程度だと。どこに行ってもその程度。警備は一切なかったです。

このお寺、先ほどからウナギ、ウナギって出ていますけど、ＮＨＫとか民放の各テレビで毎年ウナギの時期になると、土用の日になると必ずどこかのテレビで放映してくれるんです。ラジオ放送もけっこういろんなところから生放送で伝えられるような形で、電話のやり取りで茨城放送とか、放送していただいている。

谷：加藤さんはオオマンドジョウってご存知ですか。

加藤：多分その、言われたオオマンドジョウっていうのは大きなドジョウという意味だ

と思うんですけども、私なんかの親と同じ年代の方が一度テレビに出たときに、「ウナギを食べられますか」という質問をされたときに、「オオマンドジョウは食べたことがあります」っていうようなことを言って、放映されたんですね。実際にはこれはウナギを指しているのかどうかわかりませんけれども、そういう方も中にはいらっしゃるんですけれども、実際は先ほど言ったように地の、ここで生まれ育っている方、いまだに食べておりません。それはもう私もそうですし、周りの同じような方々も食べておりません。

さっき、たまたまここに今日参加されている加藤さんは、ねえ、ウナギ食べているのかな。この方はうちの隣から親が出ているわけですね。親っていうともっと前の代かな。ちょっとお話を。

加藤圭（東光寺）：ウナギは食べていません。

加藤：この人のお父さんの前のお父さんが、うちの隣から出て行った。まあ出て、分家されている。ここに住んでいるわけじゃないんです。でもそういうふうに先祖代々やっぱり守っていらっしゃる形なので。だからウナギの味を知らないと、そのくらいやっぱり、７月だけじゃない、伝統を守っている。

渡辺：多摩川にはウナギはいっぱいいるっていう？

加藤：ああ、おるでしょうね。私なんかも子どもの頃は、場所によって名前が、呼び方が違うか、この辺では流し針といって置き針ですかね。たこ糸に、このぐらいのたこ糸を付けて、針を付けて、ミミズとか小さいドジョウを付けて一晩置いておくと、ナマズとかウナギがかかったんですね。で、ナマズは持って帰ってきても、ウナギは死んでいても多摩川に放してきたんです。

山﨑：四ツ谷の人が釣っちゃったウナギを逃がしている横で、東光寺の人が持って帰ったというのは聞きました。（笑い）

加藤：だから慰安旅行でこの町内の方々が旅行に行って、浜松の舘山寺（かんざんじ）とかって行きますよね。知らないでウナギの料理を出して、そういうものを食べなかったこともある。ウナギを。ほかのものは食べてもウナギだけは残されたっていう。それが随分話題になりましたことも事実なんですね。陰では食べてても、その中にいた方で食べたことがあっても、周りが食べないですからね、食べられないですよね。

不明：日本全国ここだけなんですか、そういうことは。

加藤：いや、結構あるそうですよ。まあ言い伝えは別々にしても、ウナギを食べない地域というのはやっぱりあるそうですね。

不明：そのウナギの話なんですけどね、魚屋さんに行くと、一般の魚屋さんは養殖ウナギっていいますよね。そうするとそこに、多摩川に、本当の自然のウナギなんでしょう？そうすると高価で売れるじゃないですか。

加藤：養殖ウナギとか、スーパーで売ってるウナギも、私も口にしていません。多分ほとんど食べていません。私だけじゃないです。スーパーで安いウナギをつくっても、買って来てウナギを食べてるっていうことはないですね。だからウナギは輸入のウナギだろうと養殖のウナギだろうと、ウナギは神様だっていう信念で考えてますので、食べてないですね。

不明：じゃあ商売でとる人はいないわけね、そのウナギを。

加藤：はい、いないですね。それはないですね。

不明：そんなことしたらばちがあたるから。

加藤：ええ。だから私なんかもいろんなところで会合したときに、会食で、お弁当でうなぎ弁当だとかをとってくださるんですけど、もう60年もここの土地に住んでいるものですから、また地域のところに行っても四ツ谷の方だからといって刺身定食とか天ぷら定食を別に頼んでくれるんですね。そのぐらいやっぱり。

山﨑：ウナギ屋さんに行ってウナギ食べないで帰ってくるようですね。

加藤圭：これは聞いた話なんですけど、四ツ谷の人がウナギを食って、やっぱり気が狂ったりとかそういうことはあるみたいなんですね。

山﨑：それはご近所からの重圧でじゃない？

加藤圭：で、小さい頃からもうウナギを食うと自殺行為だっていうことで。これは人に教わったんですよ。

谷享司（仲町）：それは多分洗脳されてるよ。圭ちゃん、俺今だから言えるけど、うちの親は加藤さんの裏の出だからさ、四ツ谷4軒の1軒だから、うちは。うち小島なんです、出が。茂雄のところの甥っ子なんです。でもうちの親はウナギ食ってますよ。もう四ツ谷を出たからいいんだって言って。

加藤：出た方で食べていられる方、出ても食べない方っていうのは対照的でしょ。私も今日初めて知った同士なので。やっぱりもう甥っ子さんあたりになると全然顔の面識わかりませんので。

松本：昔ね、そこの水門がありますね。ちょうど今頃になると用水、水が引きますよ。そうするとあそこにね、あの水門のところにね、あの橋の下にね、随分何かえらウナギがいたの。すごい。ウナギだかオオマンドジョウだかわからないけども、随分いたのを覚えている。

加藤：ウナギでしょうね。

山﨑：で、よその町内から取りに来て。

松本：俺なんかよその町内。

渡辺：でもやっぱりこの地域は氾濫というのがたびたびあったって聞いている。

谷：場所も、聞くとちょうど加藤さんのところ、あそこの通りの突き当たりの辺の土手だっていうんですよ。話がね。四ツ谷下って中央線の間ですね。ちょうどあそこに河原田んぼっていう家付きの田んぼがずっと付いて、さっきの石垣が残っていた水路なんかから水を入れていたという場所なんですよ。そこの堤防だっていう話は聞いたんですけど。

加藤圭：昭和初期まで多摩川が氾濫したっていうのはありますね。

加藤：そうですね、先ほど言ったように私が生まれて記憶があるのは一度ありますからね。氾濫っていうのはね。先ほど言ったように小河内ができてから。

松本：でもそれは戦後であってね、あれはひどかったですよ。あれは中央線より下側。

加藤：そうですね、今の仲田小のあたりは水が一番多かったですね。

松本：あれ、だからあの辺の、一中のあの辺全部水浸しになっちゃったんだ。

不明：ということは多摩川はその辺で少しカーブしています。

加藤：カーブはしてないですね、ちょうど。ただ水の流れが蛇行しているのが、ちょうどこちらの日野寄りに寄っているんですね。ちょうどこの真北ぐらいで立川か昭島よりに流れている。多摩大橋のところを見ていただくと北側ですよね。それからちょうどここに来る間に流れが南に向くんです。で、日野のちょうどこの位置で多摩川の土手に当たるんですね。で、ずっと日野寄りにこう流れている状態で。あと日野橋に行くとまた立川の方に流れが寄ってくる。水の流れの形態で、こっちへ押し付けるちょうど場所だったんですね、氾濫する場所がね。

松本：中央線のピアというのは間隔が狭いですよね。昔だからね。だからあれにみな水が、まあ木は当たらなかったけども、でも木も相当流れましたからね。

加藤：そうですね、昔はね。木流が随分流れましたからね。松本のあたりの、私なんかよりも大分年が上なんですけど、そんなこと言っちゃ失礼だけど、多摩川で多分竹竿に鎌を結わえてね、木流を多摩川の土手からこう、今話に出たように多摩川の土手から１メートルから２メートルぐらいまで水がほとんどくるでしょう。水が出るたびに。そうするとその竹竿なり洗濯竿に鎌を結んでその流木を取るんですね。それがまた当時のもし火とか家具、家庭でつくるときに使った、大黒柱みたいに利用する家もあった。それだけ木が流れたんですよ。

松本：いい材木もあってね。だから全部田んぼの中に隠しておいて、それで持ち主が調べに来るって言ってたね。だからうちへ持って来て積んでおくとわかっちゃうから、みんな、もう田んぼに水がないですからね、田んぼの中にみんな隠しておいたっていう話はしましたね。

小杉：終戦直後、八高線の列車が川に落ちて、そのときの遺体だとかが流れてる人をそれで引っ掛けて。大分したと聞きましたけど、四ツ谷の方から。

松本：あれは加藤の三代吉っちゃんやなんかが。

不明：日野橋まで流れてきたよ。

小杉：そうですね、ここら辺でしたとか、茶毘に付したとか聞きましたけど。

不明：確かにこの地図を見ると蛇行して近くに来てます。

加藤：そうですね、こちらへ寄っているんですね。

山﨑：なるほど。

不明：寄っているためにここら辺が亀裂が。

加藤：そうですね。

谷：昔から多摩川の流れに関しては、日野とか国立側と争いがあって、ちょうど幕末で新選組があたふたやってたころに、ちょうど青柳と水戦争があったんですよ。名主であった佐藤彦五郎なんかが行ってるんですけれども。要は堤防を強化すると、そこに水が当たって反対側に押すっていうんです。それで青柳の堤防を壊しに行ったとかね。だからあの辺はすごい水争いっていっぱいあったんですよ。

不明：青柳ってどの辺ですか。

谷：今、国立の辺ですね。

不明：青柳っていうのはこっち側ですか。

谷：そう、反対側ですね。ちょうどこの高速のこっち側、下側ぐらいですから、この向かい側ですから。ちょうど国立のあたり。

松本：あっちの方は随分、余りまだ堤防が完璧になってなかったんじゃないの。浅川との合流だしな。

谷：堤防がなかったからね、余計に、ちょっとでも堤防をつくっちゃうと水が押しちゃう。結構多かったんです。

不明：真ん中を流れているから、こっちが切れるなら向こうも切れるかと思ったら違うんですよ。

谷：それで東京都が莫大な費用をかけたんですよ。某、美濃部都知事という方がね。水はまっすぐに流せばいいと言って多摩川の真ん中を開削したことがあったんですよ。１回雨が降ったら全部流れましたね。水は絶対まっすぐ流れないですから。

不明：こっち側、立川の方は流れないんでしたっけ。

谷：立川の方は流れないです。向こうは１段高いんですよ。

石嶋：段丘になっているから。

谷：だから日野の航空写真を見ると今でも、先ほど歩いた滝山道、あそこの「精進場」ですね。あそこは一番低いところなんですよ。あそこからちょっと見上げる、右手を見るとちょっと高台になっていますよね。あそこが多摩川段丘ですね。

不明：段丘のその裾のところへ水が来るんですね。

谷：裾ですね。そこを水が流れていますね。

不明：私は坂沿いに住んでいるんですけどね、坂が切れたって話は一度も聞いたことがないです。あそこはもう切れたっていうことは思ってなかったんですけど。

谷：何度か切れてる。ちょうどここから上に行くと越境水門みたいのがあるんですよ。それで四ツ谷の田んぼが水に浸かったということは何度かあるんですけどね。要は水がもう超えるようにしちゃってるんですよ。

不明：それは堤防が低いんですか。

谷：わざと低くしてあるんですよ。わざと低くするんです。で、堤防を高くしておくと、堤防が決壊したときに一気に崩れますよね。それを防ぐために越境の堤防をつくるんです。わざと低くしておくの、そこだけ。それでそこの上を水を逃がして、水圧を抑えるんです。

不明：お念仏講ですよね。

小杉：これはお念仏講をやっているところ。昔はお地蔵があってね、お念仏講があったということで、春と秋に２回、私もよく一緒におばあちゃんたちとお念仏を唱えたんです。鐘を確か使って。

不明：もう実は使ってないですよね、今。

加藤：使ってますよ。３月の 16 日が十六念仏という、年２回のお念仏講をここで。

渡辺：はい、どうもありがとうございました。

鈴木治：小宮で、終戦後脱線しましたよね、落っこって。その写真が昭島の八高線のも

とに飾ってあります。

渡辺：じゃ、ありがとうございました。

須永：この写真が、昔の日野用水の流れている風情を伝えています。これですね、こちらが用水です。用水のふちをずっと、砂利道ですけれどもこの先の西の東光寺方面につながると。私は生まれたのは八王子なんですけれども日野駅で降りて延々とこう歩くんですね。小さい頃から歩いて墓参り行こうと思うんですが、そのときのショットです。

12　東光寺道を行く家族連れ
昭和 28(1953)年　須永克彌氏所蔵

不明：須永さん写ってますよ。

石嶋：どれでしょう。

不明：２人しかいないから。

石嶋：おお、どっちでしょう。

須永：向こう側、帽子の方。

不明：小学生ですね。

不明：何年生ぐらいでしょう。

須永：６年生。

不明：６年生か。

石嶋：ではこちらで。

井上（肉の福井屋）：　え、私が？

石嶋：どうぞ、どうぞ、飾らせていただいたので、当時のことなど。

井上：何、嫌だ。

渡辺：ほんと田んぼだ、これは誰のうちだったんだろう。

石嶋：安西さんの田んぼなんですね。

井上：随分大勢さんで回っていらっしゃるんですね。

石嶋：そうですね、30 名以上ですかね。

井上：ああ、そうですか。

石嶋：それではちょっと、肉の福井屋さん、福井屋さんといっても福井さんじゃないんですよね。お名前は。

井上：井上です。

11　一家総出の田植え　- 西町 -
昭和 33（1958）年　安西清氏所蔵

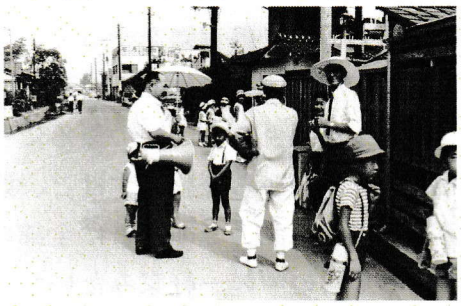
石嶋：井上さんっていうんですよね。ちょっとこの前に写真を飾らせていただいているものですから、ちょっとごあいさつだけでも。どうぞ。宣伝でもいいですよ。

井上：肉の福井屋でございます。肉の福井屋は昭和 31(1956)年にここに開店いたしまして現在に至っております。皆さんに本当に親しんでいただいている、本当の誠実な肉を売らせていただいておりますので。夕方からはこの大評判の焼き鳥を販売させていただいておりますので。お肉も本当に国産のみ扱っておりますので。今日は皆さん本当にご苦労さまでございます。いい勉強になると思います。どうもいろいろとありがとうございました。どうも、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

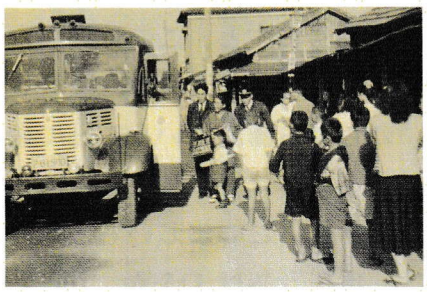
石嶋：どうもありがとうございました。こちらの方に飾っている写真は、これは安西さんという方の土地がこちらの方に、西町の方にあったんですって。で、田植えをさせられているところなんですけど、中央に写っているお子さんが、これが写真を提供してくれた安西清さんが中学校のときらしいです。田植えの時期というのは忙しいので、子どもたちは帰らされるわけですよね。そうすると先生、先だって亡くなられた御子柴先生っていらっしゃるんですけど､子どもたちの様子を見に来たときに撮ってくれた写真の１枚。これ、２枚撮っていたんですけども、ちょうど顔が出てますので、こんな形で写させていただきました。ということです。ありがとうございました。

もう１枚、ちょっとそこにありますので。またこちらの方にも１枚飾らせていただいているんですけれども、これは何か夏休みの遠足か何かのときに、子どもたちを集めてというところで、ちょうど同じ場所あたりなんですけれども１枚。これもうちょっと前だと思うんですけれども、これからバス旅行に出かける前の写真だそうです。これは、この場所をご存じの方は。これは何か図書館の本で調べると、いすゞのバスだったようです。シャーシってわかりますかね、車の下の部分だけを米軍なんかから払い下げられたものに、上に立ち上げてというような使い方をしていた時期のバスだそうです。

では、また前に進みます。



7　子供会遠足の日 - 西町 -
昭和 30(1955)年後半　真野博氏撮影

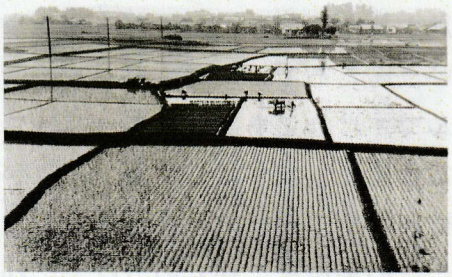


真野博氏撮影

8　日野保育園の園児たち
昭和 26（1951）年　志村章氏撮影

野原園長：日野市の、写真をご覧になっている方と思うんですけど、この保育園の創立第１号の集合写真です。私どもの保育園は、これには昭和 26（1951）年になっていますけれども、25 年に農繁期の託児所として開園いたしました。当時は日野町でして、町長さんからご指定を受けて、農繁期に託児所がないので開いてくれないかということで、私の祖母に当たる野原キクが開園いたしました。そのあとにそのまま保育園として運営してほしいということで、現在、昭和 51(1976)年に法人格をとりましたけれども、それ以前には一応認可保育園として東京都に承認をいただきまして現在に至って、今は設立 60 年を越えました。ここに写っている写真の普通向けに立っている一番後ろの右端の者が、園長の、私の祖母に当たります野原キクと申します。私の今の歳、多分 49 か 50 ぐらいの年齢だと思います。その隣にいるのが私の母でして、２代目の園長、野原和子です。抱っこされているのが私の姉でして、その下にいる何人かのうちの男の子が、兄が写っておりますけれども、これが総勢、一番初めに揃いました子どもたちです。本当に今みたいに保育園とはという、そういう規定がなくて、本当に託児所という感じでしたけれども、当時は母たちもそのあとに保育士の学校を夜間で通いまして、保育園児が 20 何人だったかでしたけれども、祖母を入れて３人で保育園をやっておりました。

その下の写真なんですけれども、日野駅から見た、ちょっと中央に、ここの後ろに今回ってきたかどうかわからないですけど、姫森公園が写っております。この一帯は全部田んぼでした。田んぼの中の一軒家みたいな感じで保育園がちょっと外れているんですけども建っておりました。ここと隣の菱山さんというところしか家がなくて、ここ一面、このあとに田んぼが終りますと、ここは門がなくてここ一面レンゲ畑で日野駅まで見渡せました。私たちの保育園をちょっとはずれていますけれども、のちのち園庭ということで確保して、徐々にこういうコンクリートの形の保育園になっていったんですけれども。この写真を撮っている真野さんという方は、この地元の方なんですけど、このおじいちゃまのひ孫さんが、今うちの保育園におられます。



9　八丁田んぼ
昭和 30(1955)年　真野博氏撮影

園児は、現在うちは 115 人。100 人の定員でも 115 人入っているんですけれども、私も３代目の園長なんですけれど、子どもたちも３代目でお預かりしております。卒園児が、

おじいちゃんやおばあちゃんがお迎えに来ております。そんな感じです。ありがとうございます。

石嶋：どうもありがとうございました。それじゃあこれから姫森の方へちょっと移っていただきます。ありがとうございました。どうも失礼します。

野原：ご苦労さまです。ありがとうございます。ここが姫森公園ですね。今行かれる。保育園はこの辺にある、今。

ここ、私に似ていると思うんですけれども、兄はこれが、もう２人とも亡くなってしまったんですけれども、母は今 82 です。まだ 24 ぐらいのときだと思います。

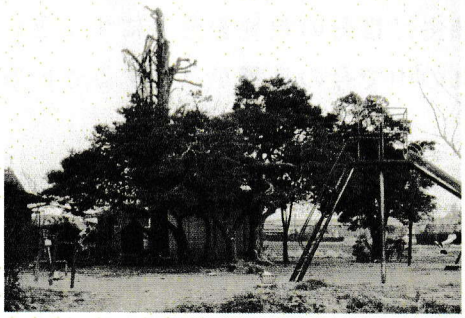
井上博司（大坂上）：小学校の先生してなかった？

野原：誰ですか。

井上：野原先生。

野原：妹が、祖母の妹が小学校の先生をやっております。ちなみに日野第二保育園とか高幡北はうちの親戚で、母の妹たちがやっている保育園なので、一応ここが日野市で一番初めに始まった保育園ということでやっております。三小と同じころにできました。だから設立記念日が大体一緒です。

石嶋：そうなんだ。はい、ありがとうございました。どうも失礼します。



10　姫宮権現　- 西側 -
昭和 30（1955）年代後半
小野信明氏撮影

石嶋：写真は、よく見ていただくと中央線が、電車が写っているのをおわかりになりますかね。小さな写真だったんですけど、ここまで引き伸ばすとかなりよく見えてるなというところです。もう今は全然、建物が建って、ちょうどまん前に本来は見えていたんですけれどもね。角度はほとんど変わらないと思います。この姫宮権現についてちょっと谷さんから。

日奉（ひまつり）の、宗頼じゃなくて宗忠じゃなくて、誰が誰ですかね、の奥さんだと言われている。確証がない？ちょっと、確証のない話なので余りお話したくないということなので。

不明：この看板、あれを見ながら。

石嶋：じゃあ写真はそのくらいにして。ここに、一応宗頼ですね、やっぱりね。日奉氏の。読んでいただければおわかりになると思うのですけど、宗頼の妻だったという方を祀っているということらしいですね。

渡辺：その高札、読んでよ。

石嶋：姫森公園になっちゃったね。児童遊園だったんだけど。

渡辺：読んで、何か見えないって。

不明：「この公園の中にある祠は姫宮権現社といわれ、かつては社もあったそうです。新編武蔵風土記によると、江戸時代の後期にはすでに塚しかなく、由来も不明とのこと

です。地域ではこの祠がある森を、ずっと『姫森』と言い伝えてきました。近くにある日野宮の祭神が武蔵七党の西党の雄、日奉宗頼だと言われているので、その妻を祀ったものではないかとも伝えられています」と。

石嶋：はい、ありがとうございました。宗頼でしたね。

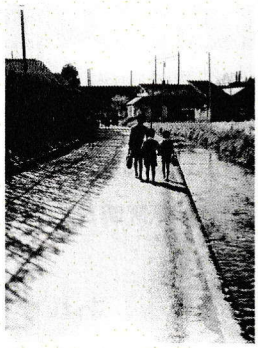
須永：日野市の、日野の名前の由来のひとつでもありますけれども、ここにある日奉宗頼、これが西党の祖ですね。西党というとこの日野、それから平山、それからずっと八王子にかけて由井とかね、八王子の川口とか、それから立川氏ね。そういったような有力者を輩出した一族ですね。武蔵七党の時代ですから、源平の時代です。

それから派生した先ほどの由井ですね、由井氏。八王子城主氏照が当初名乗った名乗りですね。由井氏を名乗っています。由井源三氏照というふうに名乗った時代がありますね。それから大石氏に養子に入って大石源三氏照。それから北条に仕えて北条氏照。この地を支配した戦国城主ですけれども、そういう歴史を持っています。それで日野というのは滝山、八王子から強い支配を受けていた土地ですね。それで佐藤隼人という方が日野用水を開削してますけども、恐らく氏照の命令によって用水を切り開いたんだというふうに考えていいと思います。

その結果この用水が枝分かれして、後世、豊かな水田地帯を持つ日野が誕生したと。で、江戸期には日野市は、禄高は、石高ですね、産高は八王子市よりも多かった。一口に日野三千石ということが言われています。やっぱり戦国領主は自分の領地を豊かにするというので、水田開発も盛んに行なうわけですね。その流れの中で今の日野が存在するというふうに考えていいと思います。

石嶋：それでは最後の日野駅の方に、用水に沿って歩いていただきます。

河野：これですね、この１つ先の信号あたりのところから駅の方にでも、この奥の方は線路です。それでここに屋根が見えた、多分藤野缶詰工場、あるいは藤野製パンですけども、あそこだと思います。ここの手前に、今ジャンボがあったこっちには、ジャンボです、今藤野さんがここまであったんですね。食堂というところまでが藤野さんで、こっち側に和田さんの工場がありました。また今藤野さんで一角が写っているかと思います。こちらの用水がこうなってますけども、道路は向こう側にありましたから、もうこちらは天野水車さんがありまして、用水の半分より３分の１ぐらいのところに分水がありまして、私の子どものその当時で、少し畑地があってキュウリが植わっていたんですけど、多分その分水のところに水車があったのを覚えています。水車はときどき見ていますので。



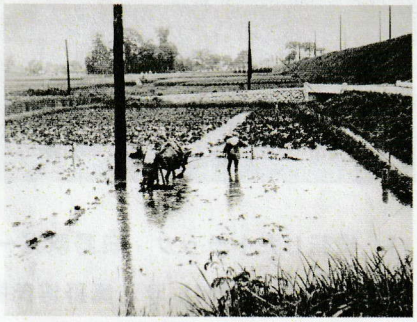
6　登校する子どもたち
昭和 20(1945)年代後半
真野博氏撮影

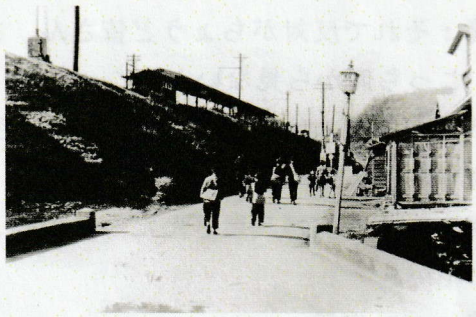
先ほど行きました保育園の方に行って、毎日ここを通っていました。藤野製パンでコッ

ペパン１つ５円でした。それにジャムかバターを塗ると 10 円と。それがお昼ご飯でしたね。そういうのが 50 年ほど前にありました。

石嶋：はい、ありがとうございました。じゃあ前に進んでいただいて。

渡辺：こちらの方が最後の所になりますけど、日野煉瓦をごらんいただけます。





2　八丁田んぼ　- 日野駅北西 -
昭和 12（1937）年　真野博氏撮影

3　日野駅北西　- 日野用水 -
昭和 27(1952)年　真野博氏撮影

河野：その前にすみません、こちらに写真１枚ありますので、藤野缶詰工場、またこの池全体のところから見た写真です。線路の隣に田んぼが１枚あることと、その上堰用水というのがよくわかると思いますけども、そういう状況でした。この橋の、私らがいる橋の上から撮った写真ということになります。それからこちらですけれども、こちらが、このレンガがありますけども、これは明治 22 年に甲武鉄道を開通するときに、日野で煉瓦を焼いて、それでこれを橋脚に使ったものです。明治 22 年ですから 1889 年になりますけど、奥の方のコンクリの部分は複線にしたときに、昭和７年、1932 年ということになります。奥はですから先ほど行きました四ツ谷の方のガードのですね、大正 10(1921)年でコンクリになっていますけれども、ここは昭和７(1932)年でコンクリということになります。

煉瓦は日野で作られたのですけども、ここにちょっと１つ持ってきました。これ、上に「ＨＢＷ」と彫られています。日野煉瓦、これはブリックワークスということなんですけども、ブリックワークスという英語を使うのは、横浜に外国の居留地ができますけど、フランスの居留地に、フランス人のジェラールという人が来ました。その人が横浜に残って、最初船に真水を売る商売をするんですけれども、そのあとで煉瓦とか瓦を焼きます。それでそれにＢＷという、ブリックワークスという刻印が押されまして、これは、ですから日野の煉瓦は横浜の技術を、横浜から人を呼んで煉瓦を焼いたということが一つの証拠になるかと思います。書類上でも横浜から招いたという書類が残っていますので、それといっ

しょに証拠になるかなと思います。横浜で焼いたこのＨＢＷが残っている煉瓦は非常に焼きが硬いです。品物がいいんですけども、実際これ以外に残されてないものはちょっと質が落ちるかなと思います。ちょっとここに置いておきますから触ってみてください。そばに１つ小回りの煉瓦が置いてありますけれども、それは昭和35(1960)年、伊勢湾台風のときにうちで家を建て直すときに購入した煉瓦です。大きさが違います、今の煉瓦とね。

東京駅の煉瓦もそうかというご質問がありましたけど、２～３年で煉瓦工場を止めていますので、多分違うんじゃないかなと思います。

渡辺：では、この写真が最後になりますけど、甲州街道のところでこれは何でか、交通事故だったのかな。トラックがひっくり返っているところなんですけど、この場所ですね。

石嶋：それで反対がちょうど皆さん、ああだめだ。こっち側から見ないと。こっち側に甲州街道が。で、バスがあるの。こういう角度で。それは平野さん、今はないですけど。

不明：ああ、文房具屋さんだったのね、前ね。そこビルが。

石嶋：不動産屋。

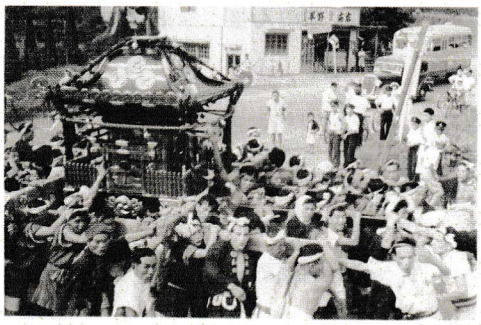
鈴木：ボンネットバスで懐かしいね。

石嶋：ところがこれ、車が満員なの。ボンネットバスはバスなんだけど、これ車が一台。

鈴木：ああ、入っちゃってるな。

石嶋：というのが最後。じゃあこれで。

1　横転したトラック - 日野駅ガード脇 -
昭和 29（1954）年　真野博氏撮影



宮神輿渡御　-日野駅西-
昭和 30(1955)年前後　真野博氏撮影

渡辺：今日はここが最後になりますけど、来年の１月６日が日野駅開駅 120 周年になります。それで今も見てきましたように、日野駅というのは駅が先に来たんじゃなくて、地元の人たちみんなで日野駅を作るために土地を出し合ってみんなで呼んだ。それで多摩川を越えることができない。それで日野煉瓦という工場を、みんなで工場を作って、日野煉瓦の、とにかく川を越えなきゃ作れないので、その橋を作るための煉瓦工場までつくって日野駅を作ったという形跡があります。

この日野駅 120 年をみんなで祝おうということで、１月 11 日の成人式の日なんですけども、この日に日野宿発見隊として大きくＪＲ、それから日野市、三者の共催でもって記念の祝典を開きます。そのときには日野宿発見隊としては、日野駅近辺の写真を、日野駅

の中心に貼って、ＪＲは「駅からハイキング」というイベントなんですけど、大勢の方が日野駅を降りて、日野駅を散策するというイベントが１月 11 日にあります。そして発見隊ではさらに新町交流センターにおいて、今尾恵介先生をお呼びして、日野の万願寺にお住まいの方なんですけど、「甲武鉄道と日野」という講演会を開きます。１月 11 日にはそうやってまちじゅうでＪＲ、日野市、日野宿発見隊というような感じで記念のイベントを開く予定になっておりますので、ぜひ皆さんご参加いただけたらと思っております。よろしくお願いします。

本日はありがとうございました。日野宿発見隊はこういうまち歩き会を年に２回から３回広報などで出しながら、歩いたりして、皆さんまちのお宝探しをやっておりますので、これからも皆さん、よろしくお願いいたします。そしてまたこのまちのことをもっと知りたいとかありましたら、日野図書館の方でいろんな図書もありますので、お調べいただけたらありがたいと思っております。本日は皆さん、ご参加ありがとうございました。日野駅はそこになりますので自由解散になります。どうもありがとうございました。

日野用水下堰
日野宮神社
栄町こうゆう館
加賀塚公園
四ツ谷下東公園
四ツ谷下西公園
仲田小学校
美王寺
四ツ谷前公園
いなげや
日野栄町店
自然休験広場（桑園跡地）
肉の福井屋
姫森公園
日野保育園
ループとうきょう
新町交流センター
日野駅
八坂神社
欣浄寺
井上源三郎資料館
日野第一中学校
普門寺
公民館
福祉センター
日野図書館
日野宿交流館
日野宿本陣
まちかど写真館 in ひの
「日野用水・今昔」会場
宝泉寺
いなげや
日野本町店
大昌寺
佐藤彦五郎新選組資料館
日野第一小学校
市民の森スポーツ公園